

『国際文化論集』の創刊にあたって

桃山学院大学国際文化学会会長

山崎 春成

桃山学院大学は1989年4月、英語英米文学科、国際文化学科の二学科から成る文学部を開設した。それにともなって地域文化、比較文化、文化交流などにかんする研究に関心をもつ桃山学院大学の専任教員を会員とし、「桃山学院大学における地域文化、比較文化、文化交流などにかんする研究を促進し、あわせて国内外との学術交流をはかることを目的」とする桃山学院大学国際文化学会が、同年7月、設立され、機関誌として『国際文化論集』を刊行することとなった。本号はその創刊第一号である。学会設立後、半年余りをへて、ささやかながら『国際文化論集』の第一号を世におくることができた。われわれの深く喜びとするところである。

地域文化、比較文化、文化交流などにかんする研究は、近年、全世界的にめざましく進展している。日本もその例外ではないといえよう。しかし、日本においては、これらの領域の研究は他国に比してかなり立ち遅れているといわなければなるまい。「国際」を冠する学部、学科が数多く設置されるようになったのは、ほんのここ数年のことにすぎない。「国際化」という言葉だけが意味内容もはっきりしないままに飛びかっているけれども、地域文化や比較文化にかんする研究・教育の重要性は、まだ広くかつ十分には理解されていないように思われる。この重要性は、いま日本はその巨大かつ強力な経済力のゆえに国際的なつながりを著しく強め、それゆえにさまざまな摩擦を引き起こしているが、それに対処するために「国際文化」の研究・教育が大切になってきたというような実利的な見地からのみ考えられてはならないであろう。桃山学院大学の学則第1条には「世界の市民として広く国際的に活躍しうる人材を養成する」というすばらしい文言がある。私たちも「世界

の市民」の立場に立って、「国際文化」の研究をすすめてゆきたい。同権同格の「世界の市民」の一員として、他の「世界の市民」たちのさまざまな文化を尊重し、互いに学びあい、理解しあい、市民同士の親しいつきあいを強めてゆくために。

いま呱呱の声をあげたばかりの『国際文化論集』だが、今後、会員諸氏の努力によってすくすくと育ってゆき、すぐれた研究の発表の場となって学界に寄与するところ多からんことを念願してやまない。